

Jan. 1936.

59

るの他はキハダと何等の差異を認めず、*P. molle* NAKAI は之に似てる。

分布 本土、四國、九州

6. *Phellodendron amurense* RUPR. エゾキハダ

本品は小葉の縁邊は常に柔毛を生ず。

分布 日本、朝鮮、滿洲、沿海州、黑龍江州、東蒙古

7. *Phellodendron sachalinense* (FR. SCHMIDT.) SARGNT. (*P. amurense* var. *sachalinense* FR. SCHMIDT.) シコロキハダ

本種及びエゾキハダは共に中肋の毛は側脈上にも及び縁邊の毛も漸々となくなり、前者との區別は漸く困難となる、*P. insulare* NAKAI は之に似てる。

分布 樺太、蝦夷、本土、四國、九州

古生植物代末 濠太利にカサイシア要素の存在

小 泉 源 一

古生植物代の終り二疊石炭紀即ち植物歴史の上より云へば石炭紀(上部石炭紀)には地球上に南北の兩植物區系對立せしが、其北半球地域の中にも特に Cathaysia (牧野植物研究雜誌第七卷六號 188 頁參照)は又他の北半球地方と異りて特色ある植物分子を有し、自ら一の區系をなして居た。其特色分子とは *Lobatannularia*, *Cansitheca*, *Emplectopteris*, *Emplectopteridium*, *Nystræmia*, *Tingia*, *Norinia*, *Asterocupulites*, *Pecopteridium*, *Cardioglossum* 等で、それに中生代要素たる *Cladophlebis*, *Pterophyllum*, *Taeniopteris*, *Chiropteris*, *Thinnfeldia*, *Saportea*, *Plagiozamites* 等を混ずる事と、尙古生代の終末なのに末だに *Lepidodendron*, *Sigillaria*, *Calamites*, *Cordaites* 等が残る事である。

此 Cathaysia 石炭紀 Flora をば昔は *Gigantopteris* Flora と呼びしが今は *Gigantopteris* Flora は東亞中生植物代の始の代表名で、石炭紀 Cathaysia Flora は *Lobatannularia* Flora とでも云ふべき事になつたやうである。

Cathaysia Flora は Malaysia 地方にも及び、又印度にも及びし事が考へられてるが、最近意外にも F. W. WHITEHOUSE 氏によれば Queensland にも及んでる事が發見された、即ち此東北濠洲の全紀に於て *Glossopteris* や *Gangamopteris* と云ふ全紀全地方特有要素と共に *Lobatannularia*, *Thinnfeldia*, *Taeniopteris*, *Emplectopteris*, *Cladophlebis*, や Cathaysia の *Sphenophyllum sino-coreanum* に近似せる *S. speciosum* や、*Ginkgoites* か *Baiera* に相違ないと思ふ、*Noeggerathiopsis Hislopi* 等のものを混ずる事がわかつた。

扱て斯うなると、Cathaysia Flora は又濠洲東北方で Gondwana Flora と相混交すると云ふ事になる。

南東濠洲地方の同期には *Cladophlebis*, *Thinnfeldia* は発見されざるも次の三疊紀となれば *Cladophlebis australis*, *Thinnfeldia Feistmantelii*, が *Phyllothecca robusta* や *Williamsonia* などと共に発見さる。

日本で生れた高山植物

小 泉 源 一

日本が洪積世の寒冷なりし時代に、其土地で生れた特有要素の多い事は誠に著しいことであるが、其等の内で當時西南日本の低地にあつたもので、漸次其寒冷の氣候に適應して寒地植物の仲間に入り、其後氣候暖和せし時に之等高山植物と行動を共にし、現在は東北日本の高山にあるが、又元來の子孫は矢張り西南日本の低地山地に生育し、決して高地には産しないものが若干ある。今其等を擧げて見ると、オホカメノキ、アカミノイヌツゲ、アカモノ、イハカミ、ハクサンハタザマ、イハナシ、オホバキスミレ、タニギキヤウ、ミヤマシグレ、カウリンクワ、等であるが、尙ハクサンフウロ、ミヤマズメソヒエ、イブキゼリ、オホバシヨリマ等は伊吹山より漸々降りて近畿の低山に産するのは奇である。

キヨスミヒメワラビの學名

小 泉 源 一

予は *Florae Symbolae Orientali-Asiaticae* (1930) p. 21 で、モクバ (コキンモフキノデ) の學名を *Dryopteris Maximowicziana* (MIQ.) KOIDZ. としたのは *Aspidium Maximowiczianum* MIQ. の type を見てした事で、尙念のため其 phototype と實物小片とを持歸つたことであつた、之と同時に *Aspidium subtripinnatum* MIQ. も亦モクバであることもたしかめた。

然るに是より先 1924 年 CHRISTENSEN 氏は *Aspidium Maximowiczianum* MIQ. をキヨスミヒメワラビと考へ *Dryopteris Maximowicziana* (MIQ.) C. CHR. としたのは無論 MIQUEL 氏の type を見ずにしたことで誤りである。

それでモクバの學名は予のものを採用する能はず、*Dryopteris subtripinnata* (MIQ.) O. KUNTZE を採用すべきであるが、キヨスミヒメワラビの學名は上の C. CHRISTENSEN のを採用し難く、やはり *Dryopteris Matsumurai* (MAKINO) C. CHR. である。

レヴェエー氏歐洲大戦中の仕事

小 泉 源 一